

Modernization Industrial Heritage Group of Kyushu Yamaguchi and Mieto Navy Place

Naoyuki NARUTOMI

Chief of the Department of Saga City Design

九州・山口の近代化産業遺産群と三重津海軍所跡

成富 直行

佐賀市都市デザイン課課長

Keyword: Modernization heritage and industrial heritage Kyushu Yamaguchi. World Heritage Site shipbuilding

Abstract

Japan introduced the technology of the West in last days of Edo period and did rapid development in the short term. The big motive power was the various tackling in the industrial field in Kyushu Yamaguchi.

This area was the window with a foreign country from an old period from the geographic characteristic near the Azia at Continent.

Because there was such a geographic characteristic near the Asiatic Continent. this area played the role that adopts the culture and technology of the several foreign countries as the window with the foreign country from the ancient times, also the role of leadership was played in Japan where advances modernization in the Meiji period from last days of the Edo period.

The modernization heritage and industrial heritage that were made with "shipbuilding" "iron manufacture" "coal" in 1910 from 1850 was caught as the concept of the rapid modernization of Japan. It is aiming at the registration to World Heritage Site as the first substantial serial nomination in our country. (It settles as one heritage group the plural heritage that is dispersing in the wide area and the method that registers it with World Heritage Site) The Mieto navy place site of Saga city is the constitution property candidacy of this heritage group as the important heritage regarding "shipbuilding". The worth is evaluated highly.

要旨

日本の近代化は、幕末に西洋の技術を導入して以

来、極めて短期間のうちに飛躍的な発展を遂げました。その大きな原動力となったのが、九州・山口における様々な産業の取り組みでした。

この地域は、アジア大陸に近いという地理的特性により、古くから海外との窓口として諸外国の文化や技術を取り入れる役割を担い、幕末から明治にかけて近代化を進める日本の先導的な役割を果たしました。

九州・山口の近代化産業遺産群は、この幕末から明治期における飛躍的な日本の近代化をコンセプトに、「造船」「製鉄」「石炭」に関わる取り組みを示す1850年から1910年に造られた複数の近代化遺産や産業遺産を一連の資産として捉え、わが国初の本格的なシリアルノミネーション（広範囲に分散する複数の遺産を一つの遺産群として世界遺産に登録する手法）により世界遺産への登録を目指しています。

佐賀市の三重津海軍所跡は、「造船」に関する重要な遺産として、この遺産群の構成資産候補となっており、その価値は高く評価されています。

1 九州・山口の近代化産業遺産群の概要

1.1 コンセプト

日本の近代化は、幕末に西洋の技術を導入してから、西洋以外の地域ではじめて進められ、しかも極めて短期間のうちに飛躍的に発展しました。このことは、世界史的にも特筆されることであります。この飛躍的な発展の過程で、その中心となり大きな原動力となったのが九州・山口です。

この九州・山口という地域は、日本の最西端に位置し、アジア大陸に最も近いことから古来より海外

への窓口としての役割を持ち、諸外国の文化や技術を取り入れてきました。

このことから、19世紀になり、欧米の国々がアジアへの進出を始めた時、九州・山口は他の地域に先んじて日本が植民地化されることへの危機感を持ち、防衛のために西洋の科学技術を導入したのです。

これが日本の近代化の始まりであり、以降も高いモチベーションを維持しながら、九州・山口は近代化を進める日本の先導的な役割を果たしました。

世界遺産登録をめざす「九州・山口の近代化産業遺産群」は、この近代化の始まりから達成の過程において、それぞれに密接に関連する4つの象徴的な要素によりその内容を構成しています。

1.2 近代化の4つの要素

まず、第一に「自力による近代化」です。

防衛のための鉄製大砲を製造するために、反射炉や洋式高炉の建設を始めました。これが日本の近代化の始まりです。これは、一冊のオランダの技術書を手本にして、反射炉建設に使う耐火煉瓦は磁器生産技術で、基礎は石造技術で、動力は水車でといった具合に、在来の高い水準の伝統技術との融合により進められ、このように自力で取り組んだことに伴う近代化への強い志向や技術・ノウハウの蓄積は、その後の技術導入を円滑なものにしました。

二番目に「積極的な技術導入」です。

開国やその後の薩英戦争、下関事件の経験から、イギリスやオランダからの技術導入が行われました。その成果として、長崎製鉄所や集成館などの機械工場群が建設され、また、炭鉱や蒸気船などの様々な分野に蒸気機関が用いられ、近代機械工業が確立されました。

三番目に「国内外の石炭需要への対応」です。

幕末から明治期に発展を遂げた洋式採炭技術は、石炭の増産体制を確立し、特に高島、三池、筑豊などの豊富で良質な石炭は、国内産業への供給はもとより、蒸気船への燃料供給の役割を担い、東アジア地域における海運網を支えました。

四番目に「重工業化への転換」です。

増産された豊富な石炭を背景に、ドイツの技術を導入して官営八幡製作所が設立されました。創業時の技術的問題を克服し、操業を軌道に乗せ、日本の近代鉄鋼業の発展に貢献しました。このことは、軽工業を中心に発展してきた日本の産業構造が重工業にシフトしていく新たな出発点となりました。

これらの4つの要素を持つ複数の資産で九州・山口の近代化産業遺産群は構成されています。

1.3 シリアルノミネーション

九州・山口の近代化産業遺産群は、日本で始めてのシリアルノミネーションで世界遺産の登録を目指しています。

シリアルノミネーションとは、広範囲に所在し、同じ歴史・文化群に属する複数の資産を構成資産として世界遺産に登録することです。

九州・山口の近代化産業遺産群は、幕末から明治期の日本の近代化を物語る製鉄・鉄鋼業、造船業、石炭産業等の関連する8つの地域に所在する28の資産で構成されています。

【九州・山口の近代化産業遺産群】の構成資産（平成24年7月現在）

- 山口県 萩市
萩反射炉、恵美須ヶ鼻造船所跡、萩城下町、大板山たたら製鉄遺跡、松下村塾
 - 鹿児島県 鹿児島市
旧集成館、旧集成館機械工場、旧鹿児島紡績所技師館
 - 佐賀県 佐賀市
三重津海軍所跡
 - 長崎県 長崎市
長崎造船所〔向島第三ドック・旧鋳物工場併設木型工場・ハンマーヘッド型起重機・占勝閣・小菅修船場跡〕、高島炭田〔高島炭鉱・端島炭鉱〕、旧グラバー住宅
 - 福岡県 大牟田市
三池炭鉱〔宮原坑施設・専用鉄道敷・三池港〕
 - 熊本県 荒尾市・宇城市
三池炭鉱万田坑施設、三角西（旧）港施設
 - 福岡県 北九州市・中間市
旧官営八幡製鉄所〔旧本事務所・修繕工場・旧鍛冶工場・遠賀川水源地ポンプ室〕
 - 静岡県 伊豆の国市
葦山反射炉
 - 岩手県 釜石市
橋野高炉跡及び関連施設
- このシリアルノミネーションの構成資産の一つとして三重津海軍所跡があります。

2 三重津海軍所跡について

2.1 三重津海軍所跡の場所

三重津海軍所跡は、佐賀市南部の諸富町と川副町にまたがって所在し、筑後川の分流の早津江川の西岸河川敷にあります。

現在、三重津海軍所跡のほとんどの部分は、日本

赤十字社の創始者で、佐賀藩海軍とも縁の深い佐野常民にちなんだ佐野記念公園として整備されています。

2.2 三重津海軍所の成り立ち

三重津海軍所は、そもそもの始まりは佐賀藩の船を管理する場所（船屋）でした。そこで長崎海軍伝習所でオランダ人から学んだ知識や技術をもとに、独自に海軍伝習を行うようになり、更に船を製造したり修理したりするドックを整備し、役所、海軍教育、西洋船製造・修理などの機能を備えた「海軍所」となりました。

三重津海軍所跡は、総延長600mに及び、4つのエリアで構成されています。

- 海軍寮エリア（役所や学校）
- 舟入場エリア（和船の管理地）
- 調練場エリア（訓練の場）
- 製罐所・船渠エリア（造船や修船の場）

このうち、特に、製罐所・船渠エリアで行われた造船と修船（船の修理）が注目されています。

ここでは、オランダから輸入した蒸気艦船「電流丸」を船渠（ドック）に引き入れて、船底の銅版の張替えを行っており、このドックの一部が発掘調査で発見されました。

また、蒸気機関の交換用ボイラー（釜）の組み立てもここでされており、さらに1865年には日本発の実用蒸気船「凌風丸」を完成させました。

2.3 三重津海軍所跡の世界遺産としての価値

発掘調査で発見されたドックの一部は、階段状の木組構造となっており、日本国内で最古の西洋船の修理用ドックと判明しました。

西洋では、主にレンガや石で造りますが、この三重津海軍所のドックは木造で、国内ではこのようなドックが他にはないため、その価値は高いものがあります。

また、三重津海軍所で行われたドックの建設、船底の修理やその材料の製造、蒸気機関の交換用ボイラーの組み立て、蒸気機関の製造といったこれらの技術は、すべて当時最先端の西洋文化を導入して行われたものです。その際、佐賀藩では、江戸時代の日本の技術を巧みに活用しながら取り入れています。

つまり、海外の文化や技術をそのまま取り入れるのではなく、日本の伝統技術を巧みに活用して、新しいものづくりを進めていったのです。このことが日本の技術力を高めることにつながり、日本の近代

化に大きく貢献したと評価されています。

3 世界遺産の登録に向けて

九州・山口の近代化産業遺産群は、平成21年1月にユネスコの世界遺産暫定一覧表に記載されました。現在、世界遺産の本登録に向けて資産の所在する7県11市（平成24年7月現在）で協議会を設置し、最短で平成27年度の世界遺産への登録を目指して準備を進めています。